

第Ⅱ章

調査研究報告および 他誌寄稿原稿

-
1. 被災地におけるサロン活動の意義と課題
～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～
 2. 被災地の親子を対象としたキャンプ事業
 3. 子どもの育ちを支える地域づくりシンポジウム
～みちのくこどもコホートからみえること～ 実施報告書
-

被災地におけるサロン活動の意義と課題 ～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～

みやぎ心のケアセンター
基幹センター 企画研究部
精神保健福祉士 渡部 裕一

I 調査の目的

2011年3月11日に発生した巨大地震により、太平洋沿岸域には津波が到来、死者行方不明者18,430名(2019.3.10時点)という甚大な被害が生じた。さらに福島第一原子力発電所事故が発生し、多くの福島県民が県外避難を強いられることとなった。隣県である宮城県には、福島県沿岸域の市町村から多くの方々が避難したが、そのような方々を対象にしたいくつかのサロン活動が、定期的で開催されるようになった。それらは現在も複数の支援団体によって継続されている。

みやぎ心のケアセンターでは、他団体が開催していたサロン活動に2014年度から協力することになり、2017年度からは主催団体として活動を引き継ぐことになった(スライド1)。内容は季節ごとの行事、食事作り、茶話会などで、参加者が各々に差し入れを持ち寄るなど、和やかな雰囲気で開催されている(スライド2)。

震災から8年が経過し、宮城県が提示する震災復興計画も終盤に差し掛かっている。また、このサロン活動についてもその進退や意義が問い直されている。本研究では、参加者へのアンケート調査ならびにヒアリング結果から、このサロンが持つ意義について検証するとともに、県外避難という特殊な状況下におかれた方々が直面した課題について報告した。今後の災害発生時のサロン活動、ひいては災害支援のあり方を検討する上での示唆とすることを目的とした。

II 調査内容

- 1 対象 ・サロン参加者18名 ・年齢 74.8 ± 6.3 (61～87) 歳
・性別 男性7名 (38.9%)、女性 11名 (61.1%)

- 2 実施方法

サロン参加者に対し以下の2つの方法を用いて調査を行った(スライド3)。

- 1) 健康関連QOL (HRQOL: Health Related Quality of Life) 尺度SF-8と独自作成した質問票を郵送、参加者に対するアンケート調査を実施した。生活状況や健康度について把握するとともに、サロンをどのようにとらえているかについて確認した。
- 2) 現在の参加者並びにサロンの運営に関与してきた関係者へのヒアリングを実施した。参加者に対しては、主に生活状況についての聞き取りを実施。関係者にはサロン成り立ちまでの経緯、これまでの運営上の課題などについて聞き取りを行った。

III 結果

アンケート回収率は100%で欠測値はなかった。SF-8では2007年国民標準値と比較すると全般的に得点率は低い傾向となったが、平均年齢を考慮すると必ずしも低いとは言い切れない(スライド4・5・6)。

独自の質問項目に対する回答では、サロンが参加者の外出や交友範囲を広げるきっかけになっており(「Q.外出の機会になっている」大いになっている・少しなっている83.3%) (「Q.交流範囲が広がった」非常にそう思う・ややそう思う88.9%)、サロン活動の今後についても継続を望む声が多いことがわかった(「Q.サロンの今後について」出来るだけ長く継続してほしい・もうしばらく継続してほしい77.8%)

(スライド7・8)。

ヒアリング結果からは、サロンの継続を望む声が多い一方で、全て自主運営で継続することに困難さを感じており、何らかの外部支援が必要と考える参加者が多いことが明らかとなった。また、参加者の多くが事故後すぐに宮城県内に転居した訳ではなく相当数の転居を繰り返していたこと、避難や転居の過程で身体的、精神的な不調を感じた方々が少なくなかったこと、現在も生活基盤の確保や将来設計に対する不安を感じている方がいることなどが明らかとなった(スライド9)。

IV 考察

今回のサロン参加者に対する調査からは、震災から8年が経過した現在でも「あいまいな喪失」の中で生活している人たちが多くことが推察された。ヒアリングでは、これまでの避難先で「賠償金は沢山もらったの？」などの質問をされ(もしくはそのような質問をされるといふ噂を聞いて)傷ついた、との回答が多数あった。避難先で傷つく経験をしながら度重なる転居を繰り返してきた人たちにとって、地元のことを気兼ねなく話せ、震災後の気苦労をいたわり合えるこのサロンは貴重な場であると考えられる。

今回SF-8で標準値より低い結果が出た要因として参加者の年齢の高さが影響していると考えられる。その点を考慮すれば、参加者の健康状態は著しく低いとはいききれないが、これまでの避難や転居で、心身に強い負担を受け、現在の日常生活にも支障のある方がいることがわかった。さらに、多くの方が避難先で賠償金について質問され、不快な思いをしたと発言されている(スライド10・11)。現在、複数のサロンに参加している方のほとんどが福島県避難者を対象としたサロンに参加しており、こういった経験がサロンの選択にも影響していると考えられる(スライド12)。

また、「サロンは故郷のことを気兼ねなく話せる」という質問に対しても、肯定的な回答が多くなっている。これまでの避難経験は、転居先での交友関係を広げる上での障壁となっており、またこのような経緯から、故郷のことを気兼ねなく話せる場であるサロンへのニーズが、震災から8年が経過した今でも高いものと考えられる。

また、ヒアリングからは参加者が複数の経緯でサロンに参加しており、サロンに対するそれぞれの想いも異なっていることがわかった。また、参加者の背景には自主避難と原発による避難との違い、もとの居住自治体の違い、震災前の東京電力との関係性の違いなど、さまざまな事情があることがわかった。アンケートではサロンの「参加のしやすさ」「プログラムの内容」に対する評価はそう高くなく、「原発のことが話題になる」との質問に対しても「大いに話題になる」の回答は少ないものだった。こういった参加に至る経緯、立ち位置や背景の違いなどが、サロンへの評価や話題の内容などに影響していると考えられる。

今回のヒアリングでは他にも利用するサロンが2つ挙がっていたが、そちらへの参加はプログラムの内容で決めているのに対し、私たちのサロンには毎回ほぼ同じメンバーが参加し、参加者数の変動は大きくない。私たちのサロンの特色は、プログラムの内容そのものの魅力よりも、参加者同士が顔を合わせ、気兼ねなく話せる「その雰囲気」にこそあると考えられる。参加者それぞれの背景はありつつも、皆で作られているこのような雰囲気の良さは、今後も大切にしていかななくてはならないと感じる。

また、ヒアリングからは福島県での居住や事業の再開を考えている方がおり、故郷に対するあきらめきれぬ感情を抱えている方が多いことが確認された。いわゆる「曖昧な喪失」と呼ばれるもので、過去の生活への深い愛着と現在の生活を大切にする感情が共存する状況といえる。今回の調査ではサロンをきっかけに知り合い、参加者同士で福島県へ出かけたり、互いの家を行き来するなどのやりとりが確認された。このような交流は互いのレジリエンスを活性化させる重要な要素であると考えられる。また過去と現在への感情を併せ持つ人たちにとっては、現在の居住地が最も心のバランスを保つ上で都合の良い位置であると言えるのではないだろうか。

V まとめ

参加者の中には、新たな居住地での関係を広げようとサークル活動などに参加する方々も少しずつ出てきている。しかし今回の調査では依然としてサロンの継続を望む声は多く、気兼ねなく話せる場に対するニーズが依然として高いことがわかった。復興計画の終了にともない、どんどん事業は整理されているが参加者のニーズが置きざりにされることのないよう、今後もこのような場のあり方について検討が必要と考えている。今後は他のサロンとの比較や、福島県避難者の実態調査なども視野に入れ、避難された方の想いととも、改めて発信の機会を考えていきたいと考えている。

(本論文は、第55回公益社団法人日本精神保健福祉士協会全国大会、第18回日本精神保健福祉士学会学術集会で発表した内容を編集・加筆したものである。)

はじめに サロン立ち上げまでの経緯

2011年3月11日の東日本大震災により沿岸域には津波が到来、甚大な被害を被った。
 さらに原子力発電所事故により、多くの福島県民が県外避難を強いられた。
 宮城県にも多くの方々が避難し、その後避難者を対象にしたサロンが開催された。
 みやぎ心のケアセンターでは他団体が実施するサロンに協力。2014年度から引継ぎ、主催団体となった。

■ 帰還困難区域 ■ 避難指示
 ■ 居住制限区域 ■ 解除準備区域

2017年3月31日、4月1日に解除された区域

スライド 1

サロンの概要

開催頻度	毎月1回、金曜日の午後開催
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> お茶会、調理、お花見などの季節に応じた行事が中心。 その他、参加者からの要望に応じて企画。
特徴	<ul style="list-style-type: none"> 他のサロンに比較すると男性の参加率が高い傾向。 登録者は20名程。毎回の参加者数は15~18名程で夫婦での参加率も高い。 概ねメンバーが固定されており、毎回の参加者数の増減は少ない。 自己負担は概ね200円~2000円の範囲。

スライド 2

調査の概要

1 対象 ・サロン参加者**18名**
 ・年齢 **74.8±6.3(61~87)歳**
 ・性別 **男性7名(38.9%) 女性11名(61.1%)**

2 実施方法 以下の2つの方法を用いて調査を行った。
 (2019年2月実施)

調査項目	内容
アンケート調査	①健康関連QOL尺度 SF-8 ②独自作成のアンケート項目 生活状況や健康度、サロンに関する意見を確認
ヒアリング調査	参加者の生活状況とサロンに対する具体的な意見について * サロン運営の関係者にもこれまでの経緯、課題等について聞き取りを実施。

*福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル、特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

スライド 3

アンケート調査結果 SF-8項目

回答項目	平均値
全体的にみて、過去1か月間のあなたの健康状態はいかがでしたか。	43.660
過去1か月間に、体を使う日常活動(歩いたり階段を昇ったりなど)をすることが身体的な理由でどのくらい妨げられましたか。	28.860
過去1か月間に、いつもの仕事(家事も含みます)をすることが、身体的な理由でどのくらい妨げられましたか。	33.631
過去1か月間に、体の痛みはどのくらいありましたか。	43.718
過去1か月間、どのくらい元気でましたか。	30.256
過去1か月間に、家族や友人とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的な理由で、どのくらい妨げられましたか。	39.858
過去1か月間に、心理的な問題(不安を感じたり、気分が落ち込んだり、イライラしたり)に、どのくらい悩まされましたか。	31.789
過去1か月間に、日常行う活動(仕事、学校、家事などのふだんの行動)が、心理的な理由で、どのくらい妨げられましたか。	41.180

*福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル、特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

スライド 4

アンケート調査結果 SF-8項目

全体的に見て過去1か月間のあなたの**健康状態**はいかがでしたか。

回答	割合
1 最高に良い	0.0
2 とても良い	11.1
3 良い	61.1
4 あまり良くない	16.7
5 良くない	5.6
6 ぜんぜん良くない	5.6
計	100.0

過去1ヶ月で体を使う日常活動をすることが**身体的な理由**でどのくらい妨げられましたか

回答	割合
1 ぜんぜん妨げられなかった	33.3
2 わずかに妨げられた	38.9
3 少し妨げられた	11.1
4 かなり妨げられた	16.7
5 体を使う日常活動ができなかった	0.0
計	100.0

*福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル、特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

スライド 5

アンケート調査結果 SF-8項目

過去1か月間に**心理的な問題**(不安を感じたり気分が落ち込んだり、イライラしたり)にどのくらい悩まされましたか

回答	割合
1 全然悩まされなかった	22.2
2 わずかに悩まされた	33.3
3 少し悩まされた	27.8
4 かなり悩まされた	5.6
5 非常に悩まされた	11.1
計	100.0

過去1ヶ月に**家族や友人とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的な理由**でどのくらい妨げられましたか

回答	割合
1 ぜんぜん妨げられなかった	38.9
2 わずかに妨げられた	38.9
3 少し妨げられた	16.7
4 かなり妨げられた	5.6
5 つきあいができなかった	0.0
計	100.0

*福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル、特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

スライド 6

調査結果 アンケート項目①

肯定的な回答が約8割だった項目

- 「サロンは参加しやすい」
- 「サロンで交友範囲が広がった」
- 「サロン以外でも参加者と交流がある」
- 「故郷のことを気兼ねなく話せる」
- 「サロンは継続してほしい」
- 「ほかのサロンも利用してみたい」
- 「外出の機会になっている」

スライド 7

調査結果 アンケート項目②

- ▶ サロンに対して「**とても参加しやすい**」、プログラムの内容について「**とても楽しい**」とする回答割合は少なかった。
- ▶ サロンで「**原発のことが話題になる**」との質問項目においても「**大いに話題になる**」との回答数は少なく、分散する傾向があった。
- ▶ ほか、質問項目「**サロンに参加したことで生活に変化はあったか**」「**福島県内や居住地の情報が得られている**」に対する「**大いに变化した**」「**大いにそう思う**」の回答割合も少ない傾向となった。

スライド 8

ヒアリング結果から

避難・転居回数	平均 7.2回 (4回～14回)
宮城県居住年数	平均 5.37年 (3年～8年)
サロン参加年数	平均 3.97年 (1年～6.5年)

スライド 9

調査結果 ヒアリング

「昔は一日働けたのに、精神的に出来なくなった。」
「避難所で身体面で不調が生じた。」

- ▶ 参加者は宮城県に居住するまでに相当数の避難と転居を繰り返しており、心身に対する負担も大きかったことが明らかとなった。

「夕食は長男宅で食べている。」
「同じ市内にいる孫と遊ぶ。」

- ▶ 家族が「減少した」との回答割合も高いが、何らかのつながりは維持されており、孤立状況にはない。

「こじんまりしていた時の方がよかった。」
「もっと参加者が増えてほしい。」

- ▶ プログラムに対する多様な要望をそれぞれが持っている。サロン成り立ちに由来すると考えられる。

スライド 10

調査結果 ヒアリング

「お金があると思われぬように気を付けている。」
「福島から転居したことを告げると、賠償金の話になるので被災者といわないようにしている。」

- ▶ 参加者の多くが避難の過程で心無い言葉に不快な思いをした経験を持っている。

「地元に戻るか、宮城で事業を始めるか迷っている。」
「お墓もあるので戻りたいが、戻っても何も無い。」
「地元に戻りたいが、子どもに反対されている。」

- ▶ 震災から8年経った現在、前向きに居住地でのつながりを広げようとする人、これから先どうするか判断しかねている人、日々の暮らしに虚無感を感じている人などさまざま。

スライド 11

ヒアリング結果から

サロン参加の有無 複数回答あり

参加していない 11%

参加している 89%

福島県民向けサロン 宮城県内サロン

Aサロン	12	Bサロン	8	Cサロン	2	Dサロン	1	Eサロン	1
------	----	------	---	------	---	------	---	------	---

スライド 12